

農業共済新聞 千葉版

掲載号	11	月	2	週号
筆者	所属	千葉県農林総合研究センター		
	職名及び氏名	水田作研究室長 鶴岡 康夫		
題名	水稻の省力栽培技術について			
備考	【写真説明】 乳苗の育苗（平置き状態で、発熱シートをかぶせて出芽させる）			

【本文】

水稻の省力栽培技術について、農林総合研究センターが取り組んでいる二つの研究の成果を紹介します。一つは、高齢化・担い手不足等、労働力の不足に対応する乳苗移植栽培技術です。もう一つは、経営の規模拡大・大規模化に対応する早期乾田直播栽培技術です。

乳苗移植栽培技術

乳苗とは葉数が2枚に満たない苗のことを言います。乳苗は育苗期間が10日と稚苗の20～25日に比べ10～15日短く、また、一箱当たりの播種量が多いことから10aに必要な苗箱数も15箱と少なくすみます。そのため、育苗から移植の労力を削減することができます。ただし、これまでの乳苗の育苗は、育苗器で加温し、苗の出芽、生育を揃える必要がありました。当研究センターではより省力化を進めるため、育苗器の代わりに発熱シートを使い、ハウス内で平置きのまま育苗を可能にする技術開発に取り組んでいます。これまでの結果は良好で、今年度は現地の農家にも実際に取り組んでももらいました。

早期乾田直播栽培技術

この技術は大型機械、大区画圃場体系のもとでレーザーレベラの装備を前提に行うものです。従来の乾田直播栽培の播種作業は4月下旬～5月上旬に行いますが、当技術では3月に行います。周囲の水田に水が入らない時期であるため、より好適な圃場条件で播種作業ができ、また、移植栽培が始まる前に播種作業を終わらせることができます。さらには、育苗を必要としないこと、12～2月の間に耕耘、均平・整地など、圃場の準備作業を行い、代かきの必要が無いことから、省力化と同時に作業競合の回避、作期の拡大を図る技術と考えることができます。しかし、出芽・苗立ちまでは周到的な管理が必要であり、そのため基盤整備圃場であることが前提となるなど、導入には一定の条件が必要です。



乳苗の育苗（平置き状態で、発熱シートをかぶせて出芽させる）

新たな技術導入には機械・施設などの投資費用や技術を習得するまでの減収リスクが発生します。自分の経営にとってどんな技術が必要なのか、メリット、デメリットを考慮し導入することで、目的に合致した省力化を実現することができます。